

氏名	ROSEN Daniel Harris (ロゼン ダニエル ハリス)		
学位の種類	博士(芸術)		
学位記番号	甲第 31 号		
学位授与日	平成 22 年 3 月 23 日		
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当		
論文題目	Clay in the New Millennium: A Ceramic Artist's Search for Identity in the Digital Age		
審査委員	主査 教授	久保田 晃 弘	
	副査 教授	近 藤 秀 實	
	副査 教授	井 上 雅 之	
	副査 茨城県つくば美術館 主任学芸員	外 館 和 子	

内 容 の 要 旨

この 20 年の中で、私の陶によるアーティストとしてのアイデンティティーは大いに進化して来た。趣味程度の活動から始まったものの、自分の粘土に対する適性に驚いた。芸術的試みに対し少しずつ真剣に考えるにつれ、粘土そのものに対する思いも強くなった。

当初は主にその頃師事していた京都出身の陶芸家の心情・価値観を吸収し、純粹主義者の態度を取り、聖なる素材である粘土を乱暴に扱うアーティストを軽蔑していた。つまり職人になりたいと思っていた。その後ハワイ大学で正式に陶芸を勉強していた時、先生方から工芸を超える思考を持ち、まだ自分の中で解き明かしていない「アート」というものを目指すように奨励された。それを受け、葛藤しながら前に進もうとしたが、なかなか器というものを置き去りに出来なかった。素材に対しての自信はついてきていたが、陶芸の歴史と陶芸コミュニティの内外から発展されてきた「陶はこうであるべき」という固定観念に引きずられていたのだ。

現在多摩美術大学博士課程にて、この論文を通し自分の陶に対する先入観を再検討し、さらに自分の考えは現代アートと社会自体にどう関係づけられるのかについても考察したいと思う。特に以下の項目について検討したい。

- 1) 自分は陶芸家か、陶を使う現代アーティストか。「陶芸(セラミック・アート)」と見なされる条件は何か。粘土で作られていると自動的に陶芸になるのか、他に何かこの分類を定義するものはないか。
- 2) 陶芸家という言葉にはどういう意味があるのか。誰がそれを決めるのか。

3) インターネットとバーチャル・リアリティーに溢れている情報時代にて「アナログ」な素材の粘土を使う行為の意義とは。

4) 素材と時代に適切な作品をどう作るか。

本論文において上記の疑問に答えようとすると同時に、自分の 21 世紀における陶芸家としてのアイデンティティーを模索した。またこの個人的な探求として、同時代のセラミック・アーティストとどう酷似し・異なるかについても追究している。

同業者たちの考えを深く理解するために、フィールド・ワークによりデータを集めた。インタビュー形式として、ターナー賞受賞のグレイソン・ペリーに、日本の現代陶芸界の巨人であり多摩美術大学の陶プログラムの創始者中村錦平、そして比較的知られていない主に日本と北米で活動する陶芸家まで、幅広く代表例をあげた。

本研究からは予想外の結果も多く得ることになり、それによって個人的なパラダイム・シフトが起こった。研究を始める前には陶芸の世界は静的であり、混乱に深く沈み込んでいると思っていた。しかし研究後には陶芸の世界に大きな成長、変貌の可能性が見えるようになったのだ。今まで陶芸の世界というのは、真空状態で存在していて、ファイン・アートの世界からは「工芸」として軽蔑されてきていた。多くの匿名で活動する陶芸愛好家たちはそれを助長していたかもしれない。しかし現在の陶芸界のスター達は自ら「陶」に関する難問題について自問自答を促し、ジャンルの変化を受け入れ、より広い現代アート界に浸透しようとしている。

多くの現代陶芸家は陶芸の特集な歴史と文化を表現の中心的なテーマとして活かしていると同時に、「陶芸家」というラベルを何としてでも避け、主に粘土という素材を使いつつも、より広い現代アートの世界を目指す。このような位置調整は、焼き物のアートの世界での階層とその知覚価値から生まれる社会的・経済的な動機もある。しかし、たくさんのインタビューを受けた人が指摘したように、この焼き物に対する汚名は社会の要素（美術館・コレクターなど）によって生きながらえている陶芸のコミュニティーに属する人にも責任がある。陶芸家のアイデンティティーにこだわりすぎ、作品より素材が大事になってしまうからだ。

アメリカと日本の歴史的かつ文化的違いが多いにも関わらず、両国の現代陶芸家の苦境は非常に似ていると思う。この世代の挑戦は粘土を器の根源から解放させるのではない。それは既に済んでいることである。この世代の挑戦は万能の素材である粘土をこの時代にどう適応させるか、ということである。その答えは、新しいメディアを作品に取り入れることであるかもしれないし、ただ単にこの情報世代に粘土で作品を作る行為の意義を再検討することであるかもしれない。

しかし今日の優れた陶芸作家たちは、自分自身に厳しい課題を課し、変化の可能性を抱き、そして現代アートの世界において陶の分野を確立していこうという強い願望を持っている。現代アートの世界で他の分野と平等に扱われるようになることは戦いであり、勝った時に批判的対話を受け入れる責任も伴ってくるだろう。このような転換は徐々に行われ

ているが、これからますます陶芸家の意識は高まり、より戦略的な活動も見られるに違いない。そして陶芸の世界と現代アートの世界の統合は必然的である。人により、この進化を歓迎し、恩恵として認める作家もいれば、じたばた泣き叫びながらも将来に導かれる作家もいるだろう。いずれにせよ、私としては非常に楽しみである。